

リスト存在文の解釈について*

熊 本 千 明

On List Readings of *There*-Sentences

Chiaki KUMAMOTO

I. 序

英語の *there* 構文の動詞の後に現れる名詞句は、新しい情報を担う要素を談話に導入するというこの構文の機能のゆえに、通例、「不定」でなければならないとされている。しかしながら、この位置に現れる名詞句は形式的に定名詞句であってはならないとする、いわゆる定性制限 (definiteness restriction) (cf. Milsark 1974, 1977) は、絶対的なものではなく、実際、定名詞句が *there* 構文の中に見られる例は、数多い。

リスト存在文 (list *there*-sentences) は、*there* 構文の動詞の後の位置に定名詞句が現れる様々なケースのうちでも、比較的明確な特徴づけがなされ、早くから注目されていたものである (cf. Rando and Napoli 1978, Milsark 1974)。このリスト存在文は、物の存在を表す典型的な *there* 構文 (existential *there*-sentences) とは明らかに異なる独自の性質をもち、まとまった一つのクラスを形成している。しかしながら、これまでの論考では、その独自性を解明することよりも、同様に定名詞句を許す他の *there* 構文との類似性に注目して、統一的な説明を行うことの方に注意が向けられていた (cf. Rando and Napoli 1978, Holmback 1984, Abbott 1993, Ward and Birner 1995)。あるいは、その特質の一面を捉えて、*it*-clefts との共通性を強調するあまり、指定文との違いに関心が向けられなかった (cf. Halliday 1967, 中村 1980, 岩澤 1991)。

本稿では、「変項名詞句」(西山 1988, 1990, 1992, 1993, 1994) の概念を援用して、絶対存在文 (西山 1994)、*it*-clefts 等と比較しながら、リスト存在文の特徴を探ってゆくことにしたい。

II. リスト存在文の特質

次の文を比較してみよう。

- (1) There's a book on the table.
- (2) There's the book on the table.
- (3) The book is on the table.

特に文脈が与えられず、空間的场所における存在の表現として用いられた場合、動詞の後に定名詞句が現れた (2) は、非文法的であるといわれる。特定の対象の場所を示すには、(3) の形式が用いられなければならない。しかし、(2) が (4a) のような質問の答えである場合には、

- (4) a. A: What can I use to prop open the door?

b. B : There's the book on the table.

(Abbott 1993 : 44)

リスト存在文としての解釈が可能となり、(2) は容認されるものとなる。ここで注意しておきたいのは、リスト存在文として解釈されたときには、(2) の定名詞句の後の前置詞句は、制限的修飾要素であるということである。この前置詞句は、名詞句の一部であり、別個の構成素ではない。これに対し、(1) の不定名詞句の後の前置詞句は、非制限的である。(Cf. Reuland and Meulen 1987, Abbott 1993) 日本語では、この違いを、「テーブルの上の本がある」、「テーブルの上に本がある」という形で示すことができる。

(5) A : ドアを支えて開けておくのに、何を使ったらいい?

B : (使えるものとして) テーブルの上の本があるよ。

この前置詞句の解釈の違いは、「何らかの対象物の空間的場所における存在」を表す「場所存在文」と「ある問いに対する具体的な答えとしての存在」¹⁾を表すリスト存在文 (cf. 西山 1994)、それぞれが示す「在り方」の違いの反映として、非常に重要である。リスト存在文がその「存在」を主張する「問いに対する具体的な答え」は、空間的場所における存在ではないので、「ある空間的場所において具体的な答えとして存在する」という解釈は、ありえないものなのである。

ここで、リスト存在文における前置詞句の制限的な解釈は、リスト存在文の意味機能自体が要求するものであって、定名詞句と不定名詞句の違いによるものではないことを、確認しておこう。リスト存在文には、定名詞句と不定名詞句のいずれも現れる。

(6) A : What's worth visiting here?

B : There's the amusement park, nice restaurants on the beach, and the museum on the wharf.

(7) (Two men talking about a friend of theirs who has suddenly gained celebrity.)

A : Do you remember Hellman? What is it about him?

B : Well, there's the amiable smile on his face, the huge umbrella he always carries, and —yeah, a tiny flower on the door to his room—you know, he always keeps a flower there, usually a wild flower of some kind he picks up on his way back.

(6) の不定名詞句 *nice restaurants on the beach*、(7) の不定名詞句 *a tiny flower on the door to his room*、どちらも、その前後の定名詞句と同様、制限的な読みが求められることになる。

さて、リスト存在文における「在り方」の特徴を見たところで、このような性質をもつリスト存在文がこれまでどのように説明されてきたか、概観することしよう。

まず、Rando and Napoli (1978) を取り上げることにはしたい。Rando and Napoli は、Milsark (1974) にならって、リスト存在文が主張するのは、それぞれの名詞句の「指示対象」の存在ではなく、それらを項目とする「リスト」の存在であると考える。リスト存在文は質問に対する答えである場合が多いけれども、そればかりではないとして、次のような興味深い例も示されている。

(8) A : I don't have any friends.

B : Oh, don't be silly! There's John and me and Susan and Peggy...

(Rando and Napoli 1978 : 308)

Rando and Napoli は気づいていないが、このような場合にも、「友達であるのは誰か」というと、具体的なその答えとして、「この人たちがいる」という形で、疑問文が関与していることに注意しなければならない。この点については、また後でふれることになる。

さて、リスト存在文では、「項目の選択」が新情報として重要なものであり、したがって、リストを構成する個々の項目は前方照応 (anaphoric) の名詞句であったとしても *there*-Insertion が許されることに

なると、Rand and Napoli は言う。しかしながら、これでは説明できない例もある。Rando and Napoli 自身が挙げる次の例は、その一例である。

(9) A: My God! How many people know about this?

B: There's me and there's you. That's all. (Rando and Napoli 1978 : 308)

(9) の会話においては、A と B がリストに挙がることは了解されているわけであるから、「項目の選択自体」が新情報であるとは言えない。この点について、Rand and Napoli (1978 : 308) は以下のように述べる。

(10) Sometimes, the items listed would obviously be there ; and it is only what is NOT on the list, i.e. the shortness of the list, that is the interesting new information.

だが、この説明は不十分である。リストに載っていないものの方が情報として重要であるというのは、たまたま、コンテキストから生じた implication でしかない。ここではリスト存在文に続く *That's all* の方が情報として重要である、ということを行っているだけであって、載るべき項目がすでに知られているリスト自体が、一体どのような意義をもつのかということは、何ら示されていない。あるときには、リストが非前方照応的であれば、項目自体は前方照応的であっても良いとし、また、あるときには、リストが前方照応的であっても、リストに載らないものが新情報であれば良い、とするのでは、「非前方照応的」という制約の説明力は、半減してしまうであろう。

Rando and Napoli は、Milsark (1974, 1977) の普遍数量詞 (universal quantifier) による説明を採らず、「非前方照応的」という制約を課した理由として、次の点を挙げる。まず、リストが *incomplete* である場合には Milsark の制約に反することはないけれども、リストは *complete* なものである場合もあるという点、また、リストが多く可能なリストの中の一つではなく *unique* なものである場合には、*universal quantification* に対する制約では説明できないという点である。 *there* 構文の動詞の後の名詞句に関して、「前方照応的であってはならない」という一つの制約をもうけさえすれば、*existential there-sentences*²⁾ も、リスト存在文も、同時に説明できると Rando and Napoli は考えるが、上でも見たように、旧情報・新情報、前方照応的・非前方照応的という概念にたよって、*there* 構文に現れる定名詞句の特質を一律に説明することはできないのではないかと思われる。

existential there-sentences とリスト存在文は、その意味機能が異なるのであるから、動詞の後に現れる名詞句に関する制約も異なる。空間的場所における存在の有無を表す *existential there-sentences* を用いて、すでに存在が了解されている世界の中の対象を新たに導入することは、奇妙なことである。しかし、世界の中の対象の存在が了解されている場合であっても、それが、「問いに対する具体的な答え」として存在することを主張するのは、十分、意義のあることである。このような両者の「在り方」の違いを考慮すれば、なぜ、リスト存在文の動詞の後に定名詞句が現れうるのか、その理由が理解できるであろう。

次に、Abbott (1993) の議論を追うことにしよう。Abbott は、まず、'list existential' という呼び名は、ここで問題にしているタイプの *there* 構文の本質を捉えていないとして、代わりに、'contextualised existential sentence' (CE) という用語を提案する。これに対して、典型的な *existential there-sentences* は、'noncontextualised existential sentence' (NE) と呼ばれる。Abbott が 'list existential' という名称を不適切であると考えるのは、四つの理由による。第一に、リストと言ったのでは、同様に項目をリストアップする次のような NE の文との区別がつかない。

(11) There was a book, a pencil, and a lamp on the desk. (Abbott 1993 : 43)

第二に、焦点の名詞句が一つしかない場合に、それをリストであると言うのは変である。第三に、(12)

の文は、Mary と John を項目とする「リストの存在」を主張するものではなく、聞き手の注意を「‘people for us to call’ という predication slot を埋めるものとしての、Mary と John の存在」³⁾に向けようとするものである。

(12) A: I guess we've called everybody.

B: No, there's still Mary and John.

(Abbott 1993: 42)

第四に、すでにその存在が想定されているあるものを提示するために、その存在を主張する、ということが適切でありうるのは、特別なコンテキストにおいてのみであり、そのことが理解されれば、区別のための「リスト」という概念は不要となる。ここで Abbott が挙げている特別なコンテキストとは、あるものの存在を忘れていて、あるものがまだ存在し続けているかどうか確かでない、あるものを目下の目的にかなうものであると考えていない、といったような状況である。

Abbott の主張は、いわゆる *there* 構文の定性制限を説明するためには、意味論的あるいは統語論的な考察ではなく、語用論的な考察が必要であるということである。Abbott は、Milsark (1977) において非文法的とされた (13) を取り上げて、

(13) There are some of the people in the bedroom.

この文も、コンテキストを与えさえすれば、‘slot-filler’ としての読みが可能であると述べる。

(14) A: Who is there left to be interviewed?

B: There are some of the people in the bedroom.

(Abbott 1993: 45)

先に見たように、この CE の解釈においては、前置詞句が名詞句の一部をなしていることに注意しよう。もし、(14) のコンテキストにおいて解釈が可能となるならば、意味論的、統語論的制約によって (13) を排除してしまうのは、正しくないということになる。Abbott は、(13) が NE の読みをもつことができないのは、名詞句 *the people* がほとんど内容をもたない表現であり、それだけで指示対象を定めることができないため、前方照応的な解釈が強要されるからであると言う。もし、この名詞句が後方照応的 (cataphoric) であり、新たな指示対象を導入するということになれば、NE の解釈が可能になるとして、次の例を挙げる。

(15) There are some of the people I was warning you about in the bedroom.

(Abbott 1993: 45)

このように、(13) の文を単に非文法的と片づけてしまう立場には、(14) の適切性が説明できないという難点があるわけであるが、では、次に、(13) は、前置詞句を別の構成素であるとする解釈においてのみ、非文法的であるとし、CE としてのもう一つの解釈は、まったく異なる構文であるとする考え方は、どうであろうか。Abbott は、この立場もしりぞけ、CE と NE、それぞれに別なカテゴリーを立てる必要はないと結論づける。CE と NE は、形式も、解釈も、機能も良く似ており、違いがあったとしても、それは、‘reminding function’ の有無というような、機能的な説明が可能なのである。さらに、NE の質問に対する答えとして CE が適切であることも、両者の間に本質的な違いがないことを示していると Abbott は言う。

(16) A: Is there anything to eat?

B: Well, there's the leftover chicken from last night.

(Abbott 1993: 48)

Abbott のいう CE、すなわち、*list there-sentences* と、NE、すなわち、*existential there-sentences* とをひとまとめにして扱うことはできないのは、既に見たとおりである。Abbott は、単に ‘reminding function’ の有無の違いと片づけているけれども、根底に、それぞれのタイプの存在文が表す「在り方」の違いという大きな問題があることを忘れてはならないであろう。また、NE と CE が同

じタイプの文であると考え理由の一つとして、NE の質問に CE で答えることができる事実を挙げているが、これは、証拠にならない。(17) は、指定文を用いた問いに対して、別のタイプの文である措定文で答えるという形になっているが、適切な受け答えである。問いと答えは、必ずしも同じタイプの文でなくとも良く、二つの文が適切な受け答えになっているということは、それぞれの文のタイプが同一であるということを保証するものではないのである。

(17) A: What's your occupation?

B: I'm a teacher.

リスト存在文を他の存在文と区別しないという点で、以上のような Abbott の議論には問題が残るが、「聞き手の注意を、ある 'predicational slot' を埋めるものとしての NP の存在に向けようとするもの」という CE の特徴づけは、リスト存在文の本質にせまるものである。'slot' を埋める 'filler' としての NP という考え方は、後で見る「変項」と、それを埋める「値」の関係を示唆するものであり、特筆すべきものであると思われる。

最後に、Ward and Birner (1995) の議論を検討することにしよう。Ward and Birner は、*there* 構文の動詞の後に現れる定名詞句はすべて、話し手が聞き手に知られていないと想定するもの、Prince (1992) のいう HEARER-NEW entity⁴⁾ を表していると考え。定名詞句で示されるものは、uniquely identifiable なものであるが、この概念と HEARER-NEW / HEARER-OLD という情報上の区分とは、別のものである。Ward and Birner によれば、*there* 構文の定名詞句の指示対象は、次のように分類されるという。

(18) I. Hear-old entities treated as hearer-new

II. Hearer-new tokens of hearer-old types

III. Hearer-old entities newly instantiating a variable

IV. Hearer-new entities with uniquely identifying descriptions

V. False definites

リスト存在文は、III. のタイプである。リストアップされる個々のものは、uniquely identifiable であっても、そのリストに含まれるということが聞き手にとっては新しい⁵⁾ とする、Rando and Napoli (1978) に近い見方をしている。しかし、Abbott (1997) も指摘するように、Prince の HEARER-NEW という概念は、あくまで名詞句が指示する entity についてのものであり、それをこのように拡大解釈するのは問題であろう。

定名詞句の表す情報の新・旧は、リスト存在文の本質に関わる問題ではないこと、また、他の *there* 構文と一律に扱うのは適当ではないことを、本稿ではこれまでくり返し指摘してきた。特に、Ward and Birner は、一つの原則で通そうとするために、リスト存在文以外の *there* 構文についても、「hearer-old であるが hearer-new として扱われている」などという、かなり無理のある説明を行っている。しかしながら、Ward and Birner が、リスト存在文の特徴として、「open proposition の変項の例示」(instantiations of the variable) を挙げているのは、注目に値する。open proposition とは、前提、あるいは、背景となる情報を表し、文の意味表示において、核強勢をもつ要素を変項で置きかえたものである。この変項を埋める要素が新情報を表し、文の焦点になるという。次の例を見よう。

(19) And there's two components in [Division H], which is the operations division : the people that do the flight activity planning procedures work, provide for the crew activity planning and the time line support and integrated procedures development and overall flight data file management ; and then there is the payload support folks,

who provide for customer operations integration and support of their onboard interfaces. (Ward and Birner 1995 : 734 [Challenger Commission transcripts, 4 / 8 / 86])

(19) では、‘X is a component in Division H’ という open proposition の変項 X の一つの値が、動詞の後の定名詞句によって示されていると、Ward and Birner は説明する。こうした open proposition が想定できないコンテキストでは、列挙が行われるとしても、リスト存在文は不適切であるという。

(20) What a great time I had last night. # There was /were John, Mary, Fred, Susan, Hilda, Xavier, and Ethel at this party I went to. We danced for hours. [Cf. John, Mary, Fred, Susan, Hilda, Xavier, and Ethel were at this party I went to.]

(Ward and Birner 1995 : 735)

これに対して、open proposition が想定されさえすれば、必ずしも「列挙」は行われなくても良いとして、Ward and Birner は次の例を挙げる。

(21) A : It's been a rotten month. John's arm has been in a cast since last week's stupid accident, and now we've cancelled that ski trip we've been planning for months.

B : Why aren't you going?

A : We wanted to *but there's the damned cast*, and it would make traveling difficult.

[OP : X is a reason for not going on the ski trip.] (Ward and Birner 1995 : 735)

Ward and Birner が、リスト存在文について open proposition の関与を指摘し、変項とそれを埋める要素の例示が行われるとしたのは良いが、それだけでは不十分である。単に定名詞句が ‘instantiation of the variable’ であると言っただけでは、値を実際に埋めて「指定する」指定文と、値の具体例としてあるものが「存在することを述べる」リスト存在文との区別をつけることができないことに注意しよう。この問題は、また、IV 節で取り上げることにしたい。

もう一つ、指摘しておきたいのは、open proposition が想定できるかどうかということだけでは、空間的場所を問題にする存在文と、リスト存在文の違いが説明できない場合があるということである。

(22) は、Ward and Birner が、リスト存在文の例として出したものである。

(22) A : What's on the office desk?

B : There's the telephone, but nothing else.

[OP : X is on the office desk.]

しかし、open proposition ということであれば、(23) の例においても同様に、‘X is on the office desk’ が関与していると思われる。A に対する答えとして、‘X is on the office desk’ という変項の値を ‘a file and three floppy discs’ で埋める、指定文であると解釈できるからである⁶⁾。(Cf. 西山 1990, 1993, 1994)

(23) A : What's on the office desk?

B : There's a file and three floppy discs (on the desk).

同じ問いに対する答えでありながら、(23) の B は空間的場所を表す存在文、(22) の B はリスト存在文という違いがあるとするならば、それをどの様に説明すれば良いのであろうか。両者の違いは、「在り方」の違いであるということ、前者は「ある空間的場所を占めてこれこれが存在する」ということを表す文であるのに対し、後者は「ある空間的場所に何が存在するか、という問いに対する答えとして(非空間的に)これこれがある」ということを表す文であるという違いがあることが、きちんと示されなければならない。この点が明確にされない限り、open proposition の関与ということだけでリスト存在文を他

から区別しようとするのは、不十分な議論であると言わざるを得ないであろう。

III. 場所存在文・絶対存在文・リスト存在文

前節では、英語のリスト存在文が、これまでどのように説明されてきたかを見た。ここでは、日本語の存在文に関する西山 (1994) の分析に注目し、それが、英語の *there* 構文にまつわる様々な問題の解決にも、有効な手がかりを与えてくれることを示したい。以下、西山の議論を追ってゆくことにしよう。

西山は、日本語存在文の主要なタイプとして、次のものを挙げる。

(24) I. 場所表現を伴うタイプ

- (i) 場所・存在文 (例:机の上にバナナがある) (中立叙述)
- (ii) 所在文 (例:おかあさんは、台所にいる)
- (iii) 所在コピュラ文 (例:おかあさんは、台所です) (措定文)
- (iv) 指定所在文 (例:その部屋に誰がいるの。洋子がいるよ) (総記)
- (v) 存現文 (例:おや、あんなところにリスがいるよ) (中立叙述)

II. 場所表現を伴わないタイプ

- (i) 実在文 (例:ペガサスは存在しない)
- (ii) 絶対存在文 (例:太郎の好きな食べ物がある)
- (iii) 所有文 (例:山田先生には借金がある)
- (iv) 準所有文 (例:フランスには国王がいる)
- (v) リスト存在文 (例:甲:母の世話をする人はいないよ。乙:洋子と佐知子がいるじゃないか。) (西山 1994: 117)

このうち、本論との関わりで特に重要なのは、絶対存在文とリスト存在文の特徴づけであるが、比較のために、場所・存在文、指定所在文の規定にもふれておくことにしよう。

場所・存在文は、(25)、(26) のような、最も標準的なタイプの存在文であり、空間的場所における対象の有無を表すものであると規定される。

(25) 机の上に本がある。

(26) 公園に女の子がいる。 (西山 1994: 118)

このタイプの存在文は、必ず場所 L を要求するという特徴をもつことを、西山は指摘する。

(27) 場所 (L) に、対象 (S) がある / いる。 (西山 1994: 118)

主語 S は、不定名詞句であることが多いが、(28) のように特定の対象を指す語も許容される場合がある。そこで、西山は、「不特定の対象を指す」という条件よりも、その名詞句の指示対象が話題にのぼっていない⁷⁾ という意味で、「前方照応の名詞句でない」という条件を課すほうが適切であると考えている。

(28) 机の上に洋子のバイオリンがあった。 (西山 1994: 118)

場所・存在文は、「場所 (L) に何かが存在する」という前提はなく、全体が新情報を担う。このタイプの文に現れる「が」は中立叙述の「が」であると西山は述べている。

形の上では、この場所・存在文と同じであるが、「場所 (L) に何かが存在する」という前提をもち、そのものの指定を求めるタイプの文が、指定所在文である。西山は、次の例を挙げる。

(29) A: その部屋に誰 (どいつ) がいるの。

B: その部屋に洋子がいるよ。 (西山 1994: 121)

(29) の B の答えは、「その部屋に洋子がいる」ということ全体を新情報として提示しているのではなく、

「その部屋にいるひとは誰かといえば、それは洋子だ」ということを主張しているのである。西山によれば、(29) は、(30) のコピュラ文と同じ意味をもつと言う。

(30) A: その部屋にいるひとは、誰 (どいつ) だ。

B: その部屋にいるひとは、洋子だ。

(30) においては、「その部屋にいるひと」が、西山のいう「変項名詞句」(西山 1988, 1990, 1992, 1993, 1994) であり、B の返答は、その変項の値を「洋子」で指定している。このように、典型的な指定文である (30) に還元することができるので、西山は (29) も一種の指定文とみなすのである。

次に、場所表現と共起しない存在文の一つである、「絶対存在文」を見てみよう。以下に示すのは、西山の例の中の代表的なものである。

(31) 太郎の好きな食べ物がある。

(32) 100 m を 3 秒で走ることのできる人間はいない。

(33) 妻の作った料理以上にすばらしい料理はない。

(34) フランスの国王が存在する。

(35) 5 世紀に立てられた寺がある。

(西山 1994 : 126)

西山は、まず、注意すべきこととして、(31)-(35) の下線部が「指示的」ではないという点を挙げる。(31) は、太郎の好きな食べ物である対象、例えば、バナナがどこかにあるということを述べているのではない。(32) に関して、一体誰について言及しているのかと尋ねたり、100 m を 3 秒で走ることのできる人間とはどのような人かと聞いたりすることは、ありえない。また、(33) は、妻の作った料理よりすばらしい料理はたくさんあるが、すべて食べられてしまったため、今それらは存在しない、という意味ではない。このような指摘をした後で、西山は、これらの文は下線部の指示対象について何かを述べているのではなく、(31) は、「太郎はある食べ物とくに好きだ」ということ、(32) は、「誰かが 100 m を 3 秒で走ることができる」という命題は偽であるということ、(33) は、「妻の作った料理が世界一である」ということを述べているのであると言う。(31)-(35) の下線部は、変項名詞句であり、西山の議論をまとめると、(31)-(33) の文全体は、それぞれ、「X が太郎の好きな食べ物である」「X が 100 m を 3 秒で走ることのできる人間である」「X が妻の作った料理よりすばらしい料理である」、そういう X を埋める値がある、あるいは、ない、という主張をしているのであるということになる。

西山の論じるように、このような絶対存在文における変項名詞句の関与を考えれば、指定文との関連は容易に理解できるものとなる。西山の説明を簡潔に示せば、次のようになるであろう。

(36) 洋子の好きな作曲家が存在する。(絶対存在文)

X が洋子の好きな作曲家である。そういう X を埋める値がある。

(37) ショパンが洋子の好きな作曲家である。(指定文)

X が洋子の好きな作曲家である。ショパンがそういう X を埋める値である。

もう一つ、重要なこととして西山が挙げるのは、これらの文における「いる」「いない」「ある」「存在する」「ない」が、空間的な意味における存在・非存在を表しているのではないという点である。絶対存在文は、変項の値の有無を述べているのであって、その値が特定の場所に存在することを述べているのではない。これは、空間的場所と共起する場所・存在文との大きな違いであると、西山は言う。

今度は、場所表現を伴わない存在文のもう一つのタイプである、リスト存在文の説明を見てみよう。例として、次のものが挙げられている。

(38) A: 東京で見るべきものはないだろう。

B: 浅草と歌舞伎町があるよ。

(西山 1994 : 136-137)

西山は、このタイプの文は、単独で用いられることがなく、(38) B がそうであるように、A のような文に対する応答としてはじめて用いられるものであるという点に注目する。(38) B は、「東京で見るべきもののリストを挙げると、浅草と歌舞伎町が存在する」という意味であるが、さらに正確には、次のように規定されるという。

(39) 「X が東京で見るべきものである」を満たすような X の値は空ではない、その証拠にその具体的な値として浅草と歌舞伎町が存在するから。(西山 1994 : 137)

(39) が示すように、リスト存在文においても、「東京で見るべきもの」に対する変項名詞句の解釈 (「X が東京で見るべきものである」) が関与していることから、西山は、リスト存在文と倒置指定文・指定文、さらに、絶対存在文との密接な関連を指摘する。

(40) 東京で見るべきものは浅草と歌舞伎町である。(倒置指定文)

(41) 浅草と歌舞伎町が東京で見るべきものである。(指定文)

(42) 東京で見るべきものが存在する。(絶対存在文) (西山 1994 : 137)

三者の関わりについての西山の解説は、実に明解である。(倒置) 指定文は、その変項 X の値を具体的に指定する。絶対存在文は、その変項の値が空でないことを表明する。リスト存在文は、変項 X の具体的な値を列挙することによって、同時にその値が空ではないことを述べる — というものである。

このように、西山は、日本語の存在文を様々なタイプに分類し、それぞれの特徴を明確に記述している。これを英語の存在文に適用してみることは、十分意義のあることであると思われる。特に、リスト存在文については、‘slot’ を埋める ‘filler’ としての個体の存在に注意を引くという機能、‘open proposition’ の関与、変項の値の例示、などとして、Abbott (1993) や Ward and Birner (1995) が断片的に理解していた特性を、西山は非常にわかりやすい形で示している。英語のリスト存在文の考察がなされる際には、他のタイプの存在文と混同しているのではないかと思われる議論もあり、また、実際、区別のつけにくい場合もあるわけであるが、この問題に入る前に、英語の絶対存在文の実例を見ておくことにしよう。次の *there* 構文は、いずれも、変項名詞句の関与した解釈が可能である。

(43) There are no books required for the course. (小西1989 : 1222)

(44) There's something that keeps upsetting him. (小西1989 : 1855)

(45) There is non-existent object.

(46) There was a kind of wine that Chris disliked. (McNally 1992 : 136)

(47) *There are some European words you can never translate properly into another language. Felhomaly. The dusk of graves. With the connotation of intimacy there between the dead and the living.* (Michael Ondaatje, *The English Patient*)

(48) If there is one object that he never uses, it is his bike.

(Declerck and Seki 1990 : 31)

(43)-(48) は、それぞれ、‘X is the book required for the course’、‘X keeps upsetting him’、‘X is non-existent object’、‘X is a kind of wine that Chris disliked’、‘X is the European word you can never translate properly into another language’、‘X is the object that he never uses’ という変項を埋める値の有無を述べるものである。(43) は、そのコースには必読書はない、ということを述べているのであって、本棚にあったはずの、そのコースの必読書に指定されている本がなくなってしまった、と言っているのではない。(45) は、‘non-existent object’ が表す存在を、西山 (1994) のいう「実在文」における存在であると考えれば、「現実界に対応物を持たないような対象」が存在するという意味で、矛盾しない解釈が可能である。西山の表現を借りれば、‘X is fictional / not

real'、そういう X を埋める値が空ではない、ということを主張しているわけであり、例えば、サンタクロース、シャーロック・ホームズなどが、その値として考えられることになる。あるいはまた、西山(私話)が指摘するように、「最大の素数」という変項名詞句の値など、いかなる可能世界においても存在しないものがある、という解釈も可能であろう。(46) は、McNally (1992) が、'existence of a kind itself' と 'existence of instances of a kind' の二つの読みをもつ、曖昧な例として挙げたものである。前者の読みでは、個々の具体例の存在にはコミットしておらず、後者の読みでは、具体的なワインがどこかの場所にあるということが述べられているという。しかし、この曖昧さは、実は、西山のいう絶対存在文と場所・存在文に対応する解釈の違いではないかと思われる。前者の読みは、「種類」の存在を主張しているのではなく、「クリスはある種のワインが嫌いである」ということ、「X がクリスの嫌いな種類のワインである」、そういう X を埋める値が空ではないということを言っているのである。

絶対存在文において、変項を埋める値が存在するという主張をすれば、次に、ではその値は何か、という疑問がわくのは当然である。(47) では、その疑問に答えるように、続けて値を示している。(48) は、Declerck and Seki (1990) が 'premodified reduced *it*-cleft' と呼ぶものである。まず、変項を埋める値の存在を仮定し、その値があるとすれば、それはこれこれであると、続けて値の指定を行う形になっている。Declerck and Seki は、このタイプの *it*-clefts に共起する *there*-sentences について、特に何も述べていないが、絶対存在文と指定文の関わりが良く理解できる、興味深い構文であるといえよう⁹⁾。

リスト存在文を答えとして引き出す疑問文は、WH 疑問文である場合が圧倒的に多いが、絶対存在文の疑問文に対してリスト存在文で答えることもある。

(49) Is there anyone left to call? There's only Mary. (Abbott 1993 : 53)

(50) Is there anybody we can get to help clean up? Well, there's everyone in the room, for a start ; and maybe we can get some of the people down the hall too.

(Abbott 1993 : 47)

(51) A : Is there anyone who can solve this problem?

B : There's Will Hunting.

WH 疑問文とリスト存在文は、指定と例示の違いはあるにせよ、どちらも具体的な値を問題にするという共通点がある。絶対存在文は、値の存在の有無を問題にするのであるから、値がある、ないという答えさえ引き出せばことが足りるわけであるが、実際には、値が存在するならその値は何であるのか示してほしい、という興味を引き起こす。また、一方で、西山の指摘するように、リスト存在文は、具体的な値を列挙することによって、同時にその値が空ではないことを述べるわけであるから、値の存在の有無を問いたいという絶対存在文の基本的な要求にも答えていることになる。このようなリスト存在文の二面性を考えれば、絶対存在文による問いの答えとして、しばしばリスト存在文が用いられることも、納得がいくであろう。

ところで、リスト存在文の動詞の後にくる名詞句は、定名詞句である場合と不定名詞句である場合があるが、不定名詞句が単独で現れた場合には、場所・存在文としての解釈との区別がつきにくくなる。例えば、McNally (1992) は、(52) の例を挙げ、

(52) a. Who is there available to fix the computer?

b. ??Well, there's Alice free right now.

c. ??Well, in the back room, there is the guy.

d. Well, in the back room, there is a guy who's competent. (McNally 1992 : 238)

リスト読みのイントネーションをもつ (52d) は、(52a) の答えとして適切であり、リスト存在文は secondary predicate を含むことができないとする主張 (cf. Safir 1985) に対する反証となるという。また、リスト存在文は否定できないとされているが、

- (53) a. Who is there available to help me?
 b. ??Well, there isn't Alice.
 c. Well, there isn't a technician, a sales rep, or a manager anywhere to be found.
 (McNally 1992 : 238)

(53c) のように「列挙」が行われている場合でも、否定は可能であると指摘する。こうした事実から、McNally は、これらの例の容認性の判断に関わっているのは、リスト存在文であるかどうかではなく、動詞の後の名詞句が定か不定かということではないかと考える。

しかし、実際に (52d)、(53c) の例がリスト存在文であるかどうかは、定かではない。西山の言うように、リスト存在文は、空間的場所を表す表現とは共起しないのであれば、(52d)、(53c) は、いずれも、場所・存在文である可能性がある。(52d)、(53c) がそれぞれ、(52a)、(53a) の問いに対する答えとして適当であるとしても、それは、ある場所に人が存在する、あるいはしない、ということ述べるがこの談話において関連性をもつ、という想定から生ずる推論によるものであるのかもしれない。この点は、検討の余地があるところであろう。

McNally は、また、疑問文に関しても、リスト存在文としての性質ではなく、名詞句の定・不定が容認度の違いを決定するとしている。ここでも、やはり、(54d) は、場所・存在文ではないかという疑問が残る。(54d) がリスト存在文であることが確実に示されなければ、証拠としては不十分であろう。

- (54) a. Who can help us?
 b. ??Is there Alice?
 c. Isn't there Alice?
 d. Is(n't) there a technician around?
 (McNally 1992 : 239)

McNally によれば、否定疑問文 *Isn't there Alice?* を発話する人は *There is Alice* を信じていることを含意していると言う。他方、否定を伴わない疑問文 *Is there Alice?* を発話する人は、*There is Alice* が真であると想定していないことを明示している。後者の場合には、*Alice* という 'name' を用いながら、'name' の使用に関する適切条件を満たしていないという点で矛盾が生じ、容認度が低くなるのだと McNally は主張する。

しかし、このように 'name' の使用条件などをもち出さなくとも、なぜリスト存在文が否定や疑問と相容れないのか、ということは、リスト存在文のもつ意味機能自体から説明がつくのではないだろうか。先に見たように、変項を埋める値が空ではないことを示すために、具体例の存在を主張するのが、リスト存在文の機能である。値の存在の証拠として具体例を挙げようとしているのに、ある具体例が存在しないと言ったり、ある具体例について、それが存在するかどうかを相手に尋ねたり、また、ある具体例の存在について断言を避けたりするのは、奇妙なことであろう。否定や疑問、さらに、modal の使用などが、リスト存在文のもつ意味機能とそぐわないことは、十分、予測されることなのである。英語の *there* 構文の考察においては、定名詞句、不定名詞句の問題に興味が集出し、様々なタイプの存在文の特性を見過ごすことがある。統一的な説明を求めることよりも、それぞれの存在文の本質的な違いを考慮した議論をすべきであろうと思われる。

IV. リスト存在文と *it*-clefts

ここでは、リスト存在文は、「*there* 分裂文」であるとする、中村 (1980) の議論を検討することにしよう。中村 (1980) は、次のようなタイプの *there* 構文と *it*-clefts (*it* 分裂文) との類似性に注目する⁹⁾。

(55) There's John who might be able to help us.

There was John who broke the window. (中村 1980 : 501)

このような *there* 構文を、中村は、*there* 分裂文と呼び、その埋め込み文が削除されたものがリスト存在文であるとする。

さて、*it*-clefts について、その埋め込み文は前提を表すといわれている。この埋め込み文は、文脈から復元可能な場合には削除できるのであるが、

(56) A : Who was Mary speaking to?

B : It was John (who Mary was speaking to). (中村 1980 : 501)

there 分裂文においても同様、その内容が復元可能であれば削除できると、中村は指摘する。

(57) A : Nobody around here is worth talking to.

B : Well, there's John (who is worth talking to).

(58) A : Is there anyone coming to dinner?

B : Yes, there's Harry (who is coming to dinner) and there's also Mrs. Jones (who is coming to dinner). (中村 1980 : 501)

これに対して、埋め込み文の内容が復元不可能な場合には、削除できない。

(59) A : Who might be able to help?

B : There's John you could try.

(60) A : What books deal with dam-building?

B : Well, there's John's book you should read. (中村 1980 : 501)

こうした両者の類似性を考察した後、中村は、両分裂文の意味的な相違は、定・不定の違いであると述べ (cf. Halliday 1967)、それは、Huddleston (1970) にしたがって、次のように示せると言う。

(61) a. There's John who is interested in this subject.

b. =One person who is interested in this subject is John.

(62) a. It's John who is interested in this subject.

b. =The person who is interested in this subject is John.

どちらも、前提として (63) をもつものである。

(63) X is interested in this subject. (中村 1980 : 501)

これをもとに、中村は、概略、次のような主張をする。

(64) X は前提を満足する項目のリストである。*it* 分裂文は、そのリストの中の項目の一つを唯一的 (uniquely) に指定する (e.g. 'John and no others')。 *there* 分裂文は前提を満足する項目のリスト X の中のある項目を非唯一的 (non-uniquely) に指定する (e.g. 'John, possibly among others')。

この中村の特徴づけは、一見、両者の違いをうまく捉えているように見えるが、実は、そこには問題が含まれている。まず、項目、つまり値が唯一的であるかどうかという点に関しては、リスト存在文であっても挙げられる値が一つに限定された、次のような例が存在する。

(65)=(49) Is there anyone left to call? There's only Mary. (Abbott 1993 : 53)

- (66) The new groom was happy with his bride, and everything, he explained, was fine. *There was just this one peculiarity his wife had.* (Paul Chance, *We're Only Human*)

(65) は、電話をかけるべき人としては、あと Mary 「だけ」 がいる、(66) は、問題となるものとして、「唯一」 妻のこの奇妙な癖があった、ということを述べている。これらの文では、値は唯一的なものであることが明らかである。さらに、もう一方で、実際に指定されるのが複数個ある値の中のいくつかである場合、そのことから、即、その文はリスト存在文であると断定することはできないことにも留意すべきである。(61a) と (61b)、(67a) と (67b)、それぞれを比較してみよう。

- (67) A: Who is interested in this subject?

a. B: Well, there's John, Mary and Chris (who are interest in this subject).

b. B: Well, some people who are interest in this subject are John, Mary and Chris.

(61b) と (67b) のもつ意味機能は、明らかに、リスト存在文の意味機能とは異なる。(61b) と (67b) は、(62b) と同様、変項を埋める値を指定する文なのである。(62b) との違いがあるとすれば、それは、一つしかない変項の値を指定しているか、複数個ある値のうちのいくつかを指定しているかの違いだけである。これに対して、(61a) と (67a) は、リスト存在文である。リスト存在文の機能は、具体的な値の存在を述べることであつて、値の指定を行うことではない。(61b) と (67b) は、たとえ可能な値が一つに限定されていないとしても、値を指定する文であり、値を列挙する文ではないことには、十分注意する必要がある。

指定というのは、いわば、答えを確定する作業である。リスト存在文は、答えを並べて示すだけで確定という作業は行わない、という点で、指定文とは大きな違いがある。変項を埋める値が複数ある場合に、その中の一部を答えとして確定するのが、*one* や *some* を用いた、(61b)、(67b) のような文である。この、答えの確定という作業は、値が一つか複数か、ということとは直接関係がない。(65)、(66) に見られるように、たとえ、値がたった一つであったとも、答えとして確定せずに、具体例として示すだけということも起こりうるのである。

このように見てくると、(64) が示しているのは、*it*-clefts とリスト存在文の違いではなく、むしろ、*it*-clefts と (61b)、(67b) のタイプの文の違いであることがわかる。値が唯一か否かという点と、指定/例示という *it*-clefts / リスト存在文それぞれの機能の相違という点、この二点に関して、(64) は、十分納得のいく説明を与えていないのである。

前節で、リスト存在文は、その機能を考えれば、否定、疑問、modal とは相容れないものであることが理解できると述べた。指定文にはこうした制約はない。ある値が、変項を埋めるべきものとして指定するのにふさわしいかどうか尋ねることも、ふさわしくなければ、否定をすることも、また、ふさわしいとする断言を控えることも、指定文の機能と矛盾しない。*one* を用いた (61b) のタイプの文が、リスト存在文よりも *it*-clefts と機能が近いことは、次のような例を見れば明らかであろう。

- (68) A: Who is interested in this subject?

a. B: It isn't John.

b. B: One person isn't John.

c. B: *There isn't John.

- (69) A: Who is interested in this subject?

a. B: Is it John?

b. B: Is one person John?

c. B: *Is there John?

(70) A: Who is interested in this subject?

- a. B: It may / must be John.
- b. B: One person may / must be John.
- c. B: *There may / must be John.

最後に、前提を表すとされる埋め込み文、言い換えれば、変項を表す WH 節の、意味内容に関する *it*-clefts とリスト存在文の相違について、簡単にふれておこう。以下の例が示すように、リスト存在文の場合には、WH 節は、質問自体の内容とは幾分かけはなれた内容のものでも許容される。

(71) A: Who is available right now?

- a. B: There's John who can help us.
- b. B: There's John who is always ready to help us.
- c. B: There's John who is always nice.
- d. B: There's John who is methodical.
- e. B: There's John who is upstairs.

(72) A: Which book is worth reading?

- a. B: There's the book by John that everyone recommends.
- b. B: There's the book by John that is on the reading list.
- c. B: There's the book by John that sells well.
- d. B: There's the book by John that is illuminating.
- e. B: There's the book by John that is inexpensive.

これに対して、*it*-clefts の場合には、質問から推測されうる範囲内で、意味的に近い内容のものしか許されないようである。

(73) A: Who is available right now?

- a. B: It's John who can help us.
- b. B: ??It's John who is always ready to help us.
- c. B: *It's John who is always nice.
- d. B: *It's John who is methodical.
- e. B: *It's John who is upstairs.

(74) A: Which book is worth reading?

- a. B: It's the book by John that everyone recommends.
- b. B: It's the book by John that is on the reading list.
- c. B: *It's the book by John that sells well.
- d. B: *It's the book by John that is illuminating.
- e. B: *It's the book by John that is inexpensive.

これは、*it*-clefts は値を指定するものであるため、値が指定されるべき変項がすでに想定されていることを要求するのに対し、リスト存在文は、具体的な値を例示することによって、同時に、ある変項を埋める値が空でないことを述べるものであるため、前もってどのような変項が問題にされているのかが了解されていなくても良い、というような違いによるのかも知れない¹⁰⁾。この点に関する両者の相違は、さらに詳しく検討する価値があるであろう。

V. 結語

ここでは、*there* 構文の様々な用法のうち、特にリスト存在文と呼ばれるものを取り上げ、その特質を考察した。西山 (1994) は、変項名詞句の関与という観点から、日本語のリスト存在文と指定文、絶対存在文の関連性を指摘するが、英語に関しても、リスト存在文と *it*-clefts とが、類似点をもつものとして、並列して論じられることがあったのは興味深い。西山の提案する日本語の存在文の分類が、そのまま、英語にも当てはまるのか、日本語のそれぞれのタイプの存在文が、英語ではどのような表現形式に対応するのか、さらに観察をすすめる必要があるであろう。英語においては、動詞の後に不定名詞句がきた場合、場所・存在文とリスト存在文のどちらの解釈が意図されているのか、明らかでないことがある。何を手がかりにして、解釈を一義的に定めることができるのであろうか。また、質問が先立ち、動詞の後の名詞句が定名詞句で、リスト存在文の読みをもつとされる場合でも、変項が空間的場所における存在と関わりをもっていれば、リスト存在文の解釈と指定所在文の解釈の差異が認知されにくくなる。これをどのように説明すればよいであろうか。これらの問題の解決は今後の課題とし、また、稿を改めて論じることにはしたい。

*本研究は、平成13年度～15年度文部省科学研究費補助金・基盤研究 (C) (2) (研究課題:『コピュラ文に関する意味論的・語用論的研究』研究代表者:西山佑司、研究分担者:小屋逸樹、熊本千明) の助成を受けたものである。有益な助言を下された西山佑司先生、例文のチェックをして下さった Gregory K. Jember 氏に謝意を表する。

註

- 1) 第 III 節以降、西山 (1994) の規定にしたがい、「変項 X を埋める具体的な値の存在」と表現する。
- 2) existential *there*-sentences と呼ばれるものには、実は様々なタイプの存在文が含まれる。今後、整理する必要があるであろう。
- 3) ‘...the utterer of (5B=our (12) B) does not seem to be asserting the existence of a list with Mary and John on it, but rather simply drawing the addressee’s attention to the existence of Mary and John as filling the predication slot ‘people for us to call’.’ (Abbott 1993 : 43)
- 4) Prince (1992) は、情報の新・旧を、談話の中に登場したかどうか、聞き手に知られているかどうか、という二つの観点から分析する。DISCOURSE-NEW / DISCOURSE-OLD と HEARER-NEW / HEARER-OLD を区別するのは、談話に登場していなくても (DISCOURSE-NEW)、聞き手に知られている (HEARER-OLD) と想定できるものがあるからである。談話に登場したために聞き手に知られているものは、DISCOURSE-OLD で HEARER-OLD ということになる。
- 5) Abbott (1997) は、open proposition が関わる例として (i) を挙げ、

(i) A : Don’t forget that Kim will be bringing a salad.
 B : Oh right — *there is that*. (Abbott 1997 : 106)

 A の言ったことを受けての B の発話における *that* は、いかなる意味でも聞き手にとって「新」であるとはいえないとして、Ward and Birner (1995) を批判する。また、この例は、variable が具体的な物ではなく、状況、要因というようなものにまで広がっている例であるとして、注意を喚起している。
- 6) 次節で見るように、(23) B は、指定所在文の例である。
- 7) 洋子のバイオリンが既に話題にのぼっているコンテキストでは、「洋子のバイオリンは机の上にあった」という所在文が使われるべきであると、西山は言う。
- 8) 関 (2001) には、指定文の [NP be NP]_S という基本形式が入れ子型に組み合わさった例として、(i) の例が挙げられている。

(i) There’s one thing I can’t understand, is they’ve had this test-ban treaty and it’s worked. (関 2001 : 124 [S. Terkel, *Division Street : America*])

このような構文に現れる *there* の特質について関は言及していないが、絶対存在文に続けて値を示すという形式の拡張として、非常に面白いものである。

9) 中村は、両分裂文には、次のような五つの類似点があると指摘する。(i) 埋め込み文は制限的關係節ではない (ii) 主語の關係代名詞が削除できる (iii) 縮約構造をとる (iv) 埋め込み文は前提を表す (v) 埋め込み文が削除可能である。(ii)、(iii) の例として、以下の文が挙げられている。

(ii) a. There was Danson died the other day.

b. It was your brother told me this.

(iii) a. There's John playing with Susan. / in the back seat. / outside.

b. It's John playing with Susan. / in the back seat. / outside.

(中村 1980 : 501)

10) 例えば、(i) の A の発話に対して、*it*-cleft を用いて答えるのはおかしいであろう。

(i=(57)) A : Nobody around here is worth talking to.

a. B : Well, there's John (who is worth talking to).

b. B : *Well, it's John (who is worth talking to).

参考文献

- Abbott, B. (1993) "A pragmatic account of the definiteness effect in existential sentences." *Journal of Pragmatics* 19, 39-55.
- Abbott, B. (1997) "Definiteness and existentials." *Language* 73, 1997.
- Bolinger, D. (1977) *Meaning and Form*. London : Longman.
- Cartwright, R. (1960) "Negative existentials." *The Journal of Philosophy* 57, 629-639.
- Declerck, R. (1988) *Studies on Copular Sentences, Clefts and Pseudo-Clefts*. Leuven : Leuven University Press.
- Declerck, R. and S. Seki (1990) "Premodified reduced *it*-clefts." *Lingua* 82, 15-51.
- Everett, A. and T. Hofweber (eds.) (2000) *Empty Names, Fiction and the Puzzles of Non-Existence*. Stanford : CSLI Press.
- Halliday, M. A. K. (1967) "Notes on transitivity and theme in English, Part 2." *Journal of Linguistics* 3, 199-244.
- Holmback, H. (1984) "An interpretive solution to the definiteness effect problem." *Linguistic Analysis* 13, 195-215.
- Huddleston, R. D. (1971) *The Sentence in Written English : a Syntactic Study Based on an Analysis of Scientific Texts*. Cambridge : Cambridge University Press.
- 岩澤勝彦 (1991) 「It 存在文の存在について」安井稔博士古希記念論文集編集委員会・編『現代英語学の歩み』24-61. 東京 : 開拓社.
- 小西友七 (編) (1989) 『英語基本形容詞・副詞辞典』東京 : 研究社.
- 熊本千明 (1989) 「日・英語の分裂文について」『佐賀大学英文学研究』第17号, 11-34.
- 熊本千明 (1994) 「*It*-Clefts の解釈をめぐる一 Specificational・Predicational 以外の解釈の可能性」『佐賀大学英文学研究』第22号, 17-36.
- McNally, L. (1992) *An Interpretation for the English Existential Construction*. Ph. D. dissertation, UCSC.
- Milsark, G. (1974) *Existential Sentences in English*. Ph. D. dissertation, MIT.
- Milsark, G. (1977) "Toward an explanation of certain peculiarities of the existential construction in English." *Linguistic Analysis* 3, 1-30.
- 中村捷 (1980) 「There 分裂文」『英語青年』第125巻, 第11号, 500-502. 東京 : 研究社.
- 西山佑司 (1985) 「措定文・指定文・同定文の区別をめぐる」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第17号, 135-165.
- 西山佑司 (1988) 「指示的名詞句と非指示的名詞句」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第20号, 115-136.
- 西山佑司 (1990) 「コピュラ文における名詞句の解釈をめぐる」『文法と意味の間 : 国広哲弥教授還暦退官記念論文集』133-148. 東京 : くろしお出版.
- 西山佑司 (1992) 「役割関数と変項名詞句」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第24号, 193-216.
- 西山佑司 (1993) 「コピュラの用法とメンタルスペース理論」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第25号, 49-82.
- 西山佑司 (1994) 「日本語の存在文と変項名詞句」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第26号, 115-148.
- Prince, E. F. (1992) "The ZPG letter : Subjects, definiteness, and information-status." In S. Thompson and W.

- Mann (eds.) *Discourse Description : Diverse Analyses of a Fundraising Text*, 295-325. Amsterdam : John Benjamins.
- Rando, E. and D. J. Napoli (1978) "Definites in *there*-sentences." *Language* 54, 300-313.
- Reuland, E. J. and A. G. B. ter Meulen (eds.) (1987) *The Representation of (In)definiteness*. Cambridge, MA : MIT Press.
- Safir, K. (1985) *Syntactic Chains*. Cambridge : Cambridge University Press.
- 関茂樹 (2001) 『英語指定文の構造と意味』東京 : 開拓社.
- Sperber, D. and D. Wilson (1986) *Relevance : Communication and Cognition*. Oxford : Blackwell.
- Ward, G. and B. Birner (1995) "Definiteness and the English existential." *Language* 71, 722-742.
- Wilson, D. and D. Sperber (1979) "Ordered entailments : An alternative to presuppositional theories." In C.K. Oh and D. Dinneen (eds.) *Syntax and Semantics. Vol. 11 : Presupposition*, 299-323. New York : Academic Press.
- Woisetschlaeger, E. (1983) "On the question of definiteness in 'an old man's book'." *Linguistic Inquiry* 14, 137-154.